

特集

生活を保育へ Vol.3
—片づけるといふこと—

片づけの意味を考える

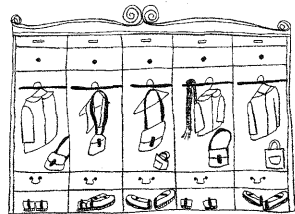
—お片づけはイヤなこと?—

掘越 紀香

片づけの時間、子どものころはあまり楽しくない時間だったのを覚えていませんか。友達と一緒におもちゃを出して、どんどん部屋の中に広げていく時は、あんなにワクワクするのに、片づけになると気持ちがいぼんでしまうのです。また、日々の保育では片づけの時間になると、なかなか片づけない子どもを相手に奮闘されている先生方もいらっしゃるでしょう。何だか切ない気持ちになって、ため息まで聞こえてきそうな「お片づけ」。

ここでは、保育中での「片づけ」について、次の三点から考えてみたいと思います。一つは「元の場所に戻す」「いるものを残し、いらぬものを捨てる」という片づけの行為そのもの。二つめは「自分で遊んだものを片づける」というルールを学ぶこと。そして、三つめは「遊びに区切りをつける」という気持ちの切り替えです。

まず「元の場所に戻す」「いるものを残し、いらぬものを捨てる」という片づけの行為です。この



行為には、子どものさまざまな知的側面が含まれています。たとえば、ままごとコーナーでの片づけ行為では、棚や引き出しの置き場に応じて、お皿やカップ、包丁、おはし、人形、エプロンなど、ものを分類することが必要です。紙を切って作ったごちそうやメニューを残したいか捨てるかを考え、捨てるのであれば、燃やせるものか燃やせないものかをゴミ箱の前で判断することになります。ほかにも、エプロンや布を畳む時、角をきれいにそろえるとよいことや、お盆を使えば一度にたくさんお皿を運べること気づくことも大事な学びでしょう。

積み木や巧技台を片づける時には、「おみこし、わっしょい、わっしょい」と何人かで協力して運ぶ姿が見られ、持ち方を工夫したり、歩き方を調整したりしています。さらに、三角や四角、長四角の積み木を一定の高さまで、きれいに並べる作業に熱中し、三角と三角で四角になることを活かして積んだり、「こうしたら入るんじゃない？」と話し合いな

がら進めたりしています。このように「片づける」行為自体には、さまざまな学びがあるのです。

次に「自分で遊んだものを片づける」ルールを学ぶことについてです。普通、「片づけ」といった場合、しつけにつながるこの側面が強調されます。保育の場でも、まずは自分のものを片づけることが大事でしょうし、先生方も誰がどこでどんな遊びをしていたかをとでもよく見ている、片づけの時にいないと、「○○ちゃん、片づけましょう」と声をかけています。また、使った後そのまま忘れて次の遊びへ移ってしまうことも多く、そんな時先生はその場で「一度片づけてから行きましょう」と声をかけたり、お集まりの時に困った状況（キャップのない油性ペン、保育室からなくなった虫取り網やボールなど）を取り上げて、使い方や片づけの仕方を丁寧に確認したりします。

細々としたものや重いものを片づけたり、きれいに整えたりすることは、遊んだ後の疲れも手伝って

面倒に感じることもあるでしょう。しかし、日々の保育の中で片づけの時間を繰り返し経験し、「自分で遊んだものを片づける」ことを何度も教えられた積み重ねによって、片づけに対する責任感や必要感を身につけていくのです。

一方で、自分だけでなくほかの人の分も片づける子どもの存在も大事にしたいと思います。片づけを促した時に「そこで遊んでいないよ」と子どもが答えるのは、「自分で遊んだものを片づける」ように教えていけば当然のことなのでしょう。しかし、年齢が上がるにつれて、自分の遊んだ場所だけでなく、クラスや園をきれいにしようという気持ちや、周りのことを考えられる優しさも育ててほしいのです。先生が「片づけを手伝ってくれて助かったわ。ありがとう」と感謝の気持ちを伝えることは、子ども「役に立ちたい」「手伝いたい」気持ちを高めることにつながるのではないのでしょうか。

また、片づけの途中で先生が「お部屋がだんだん



▲リレーのはちまきをたたむ

きれいになってきたわよ。あともう少し」と励ましたり、「自分からゴミを見つけて拾っているのね、えらいな」とほめたりする時も、子どもは張り切って片づけます。片づけの後、「みんなでがんばって片づけたので、とてもきれいになりました」「積み木をきれいに片づけられるようになって、すごいわ」とほめられれば、「次もがんばって片づけしよう」と動機づけが高まるでしょうし、「きれいなお部屋になって気持ちいいわね」と声をかけられれば、きれいにする心地よさを少しずつ感じるようになるでしょう。大変な片づけも、先生のことばかけに励まされて乗り越えていくのです。

さらに、保育室には、子どもたちが片づけしやすいうような工夫がたくさんあります。棚に道具の絵やラベルを貼ってわかりやすくしたり、置き場所を固定したり、出し入れしやすい場所（位置や高さなど）を用意したり、作品やおみやげなどの置く場所を用意したり。年長児のクラスでは、四月当初ラベ

ルがないことの不便さを経験した後、子どもが自分たちでラベルを作って貼っていくこともあります。子どもが自分（たち）で片づけられるような先生方の工夫には、いつも感心させられます。

最後に、「遊びに区切りをつける」という気持ちの切り替えについてです。楽しい遊びに区切りをつけることは難しいことかもしれません。遊びに区切りがつけられなければ、片づける気持ちにはなれないでしょう。保育の場では、この気持ちの切り替えがしやすいような援助がなされています。

たとえば、「そろそろお片づけにしましようね」という声かけ。すぐに片づけ始められる子どもはよいですが、中には遊び途中での切り替えが難しく、片づけのために心の準備を必要とする子どももいます。だからこそ、「そろそろ」が大事なのです。そのままごとをしていた子どもたちから「えー、まだ誕生パーティーしてない」という声が上がれば、「じゃあ、ケーキを食べたらお片づけしましよう

ね」と柔軟に対応できます。砂場などの片づけに時間のかかる遊び場には、早めに片づけの声をかけることがよく行われています。また、片づけを予告したり、時計のわかる子どもたちに「長い針が6の所きたら、お片づけですよ」と先に話しておく、
「あと少しでお片づけだから…」と自分たちで遊びの進度を早めたり、遊びを終わりにできるような流れにしたりして、片づけまでに遊びの区切りをつけようとする姿が見られるのです。

時には片づけの時間になっても、なかなか気持ち切り替えられずに遊んでいる子どももいます。巧技台で遊び続けていた子どもは、ほかの子どもから「片づけられない！」と文句を言われ、いよいよやめなくてはいけなくなつた時、「あそこまで行つたら、終わりにするから！」と宣言して、気持ちを切り替えようとしていました。自分で設定した区切りを明確に表現することで、遊びたい気持ちに折り合いをつけていたのでしょうか。

観察での印象ですが、子どもが十分に遊び、その日の活動に満足していると、片づけの時間になつても、気持ちの切り替えがしややすいように感じます。片づけをしながら、「すつごく大きいのができたんだよな」と遊びの余韻を楽しんだり、その満足感や達成感を味わつたりしているようです。このように考えると、片づけをスムーズにするためには、その前の遊びを充実させることが大前提なのかもしれません。

以上、保育の場での片づけの知的な側面や、片づけに込められた意味、片づけの難しさ、先生方の援助の工夫などについて、三つの観点から考えてきました。日々の保育で繰り返される活動だからこそ、子どもの成長に大きく影響することを考慮して、片づけの時間を丁寧に地道に積み重ねていくこと、同時に遊び自体を充実させることの必要性を改めて感じました。また、家庭生活の中で片づけをあまり身につけていない場合もあるため、園での生活が一層



▲ボールかけの片づけ

重要になるでしょう。

最後に、昨年度の卒園を間近に控えたころの印象的なエピソードを紹介して、この稿を終わりたいと思います。片づけの時間、年長女児チナツがスチールの縄跳びかけを外から運んできました。クラスみんなの縄と本体の重さで、とても重そうです。観察していた私が手伝おうとすると、チナツは「できるから大丈夫!」と笑顔で答えました。段差の所は、近くにいたカレンとリョウヘイに手伝ってもらいましたが、無事ホールまで運んで片づけました。以前は自分の思いをなかなかことばに表せなかったチナツですが、自分で片づけられるという自信を、「できるから大丈夫!」という頼もしいことばと、さわやかな笑顔で表現してくれました。片づけという場面で示されたチナツの成長ぶり。このようなうれしい出逢いがあるために、私は保育の観察をやめられないのです。

(大分大学)